
I. はじめに一調査の目的・方法—

1. 調査の目的

チュー渓谷考古学プロジェクト (Chuy Valley Archaeological Project: CVAP) は、同地を通っていた主要な東西交易路 (天山北路) 及びこれに関連して営まれた植民都市の成立と発展を、遊牧社会との関係性の中で適切に理解することを目的とした。このために、キルギス共和国北部に位置するチュー渓谷 (Chuy Valley) 西部を調査研究対象として、地域文化史の精細な復元を目指して、2018 年から 2022 年にわたり計 3 シーズンの考古学踏査を実施した。

天山山脈が南に控えるチュー渓谷は古来、遊牧民が活躍した草原 (ステップ) 地帯の南限を縁取っていたが、中世にはいり定住農耕民であるソグド人が入植したことにより、定住・遊牧両社会が相互に直接的に関わる境界地帯となった。この境界地帯は、「シルクロード」の名で親しまれる東西交易路上の重要な経由地であり、東方はイリ渓谷 (Ili Valley) 及びトルファン盆地 (Turpan Depression) を経由して河西回廊を通して中国 (西安) に至り、西方はタラス (Talas) 川を渡り南西方向のトランスオクシアナ (Transoxiana、あるいはソグディアナ Sogdiana) やペルシア、さらに西方へ通じていた。この交易路を辿って多くのヒト・モノ・情報がユーラシア大陸を東西に行き交ったことは、重ねて説明するまでもないであろう。上記のような東西方向の結節点であったと同時に、チュー渓谷は北のカザフ高原と南の天山山脈の中間に東西に広がっているため、遊牧民による垂直 (南北) 方向の季節移動経路上に位置することとなり、その逗留地に適していたと考えられる。したがって、同渓谷は東西に貫く交易路と南北に貫く遊牧民の季節移動路が交差する場所であったと、理解することができる。

チュー渓谷における従来の考古学調査は、一方では拠点的な都市やそれに付随する城塞等を、他方では遊牧民による大型墳墓 (クルガン Kurgan) を主な研究対象としてきた。しかしながら、元来遊牧民の生活圏であった

同渓谷とその周辺には、彼らが残した日常的な生業に関わる多様な生活痕跡が所在しているはずであり、実際に鉄器時代においてはこうした種類の遺構がごく限定的にはあるが確認されてきた (cf. Мопшкова 1992: 84; Chang et al. 2003)。このように、遊牧社会の痕跡の通時的な認識を欠いてきたことにより、これまでの考古学調査研究はチュー渓谷における基層文化の本質を精確に把握するには至っていない。また、現在の東西幹線道路から離れて位置する中世定住集落の探索も十分とは言えず、中世における都市定住社会によるチュー渓谷の開拓や東西交易路網の構築過程に関する詳細が通史的に明らかになっていないとは言い難い。こうした事情のため、遊牧・定住社会に関する上記の研究視点が統合されて、農牧境界地帯であったチュー渓谷に特異な文化的生態が総合的に理解されることはほとんどなかった。特にチュー渓谷西部における調査研究状況は、東部に比べて遅れをとってきた。西部においては、遺跡の継続的な調査及び成果の公刊はおろか、考古学踏査による遺跡の把握も、1954～55 年の中世遺跡の包括的調査 (Кожемяко 1959) 以後は行われておらず、不十分なまま放置されてきたといっても過言ではない。このため、チュー渓谷西部における地域文化史については、1941 年の調査に基づいてまとめられたチュー渓谷全域における物質文化の通史的概説 (Бернштам 1950: 104–141) 以上には、理解が進んでいない状況であった。

上記のような地理的・文化的特性と調査状況に鑑みて、東西交易路網の東方への入口部分にあたり、かつ、遊牧民による南北方向の季節移動経路上にあるチュー渓谷西部の地域文化史を通史的に精緻に再構築することは、中央ユーラシアにおける文化的・社会的基層を成す遊牧社会とその後に発展・拡大した都市定住社会の関係性を統合的に理解し、併せて、同地に広く張り巡らされることとなった交易路網の歴史的意義を今後論じていく上で欠かせないと考えた。

調査開始に先立つ 2018 年 9 月には、独立行政法人

国立文化財機構奈良文化財研究所とキルギス共和国国立科学アカデミー歴史文化遺産研究所（現 歴史考古学民族学研究所）は、5年間の期限で考古学調査に関する研究協力協定を締結した。同年、この合意に基づいて、チュー渓谷西部において考古学踏査を開始した（山藤・アマンバエヴァ 2020, 2021a/b）。

2. 調査の方法

上記の目的に合わせて、本プロジェクトは、チュー渓谷西部の拠点都市カラ・バルタ（Kara-Balta）周辺の、東西約 35 km、南北約 50 km、約 1,270 km² の範囲を調査対象とした（図 1. 1）。調査対象面積が広大かつ南北に長大であることには 2 つの理由がある。まず、天山山脈北麓の遊牧民は古来、山岳部と平野部の高低差を利用した垂直（南北）方向に季節的な移動を行ってきたので、チュー渓谷ではキルギス山脈北麓からチュー川までのできるだけ広い範囲を調査研究の視野に入れない限り、遊牧民の生活痕跡を十分に把握することはできないと考えたからである。また、6 世紀の都市化以降には、都市定住社会による東西交易路網の整備が進んだが、時期による路線の移動・切り替えが起こった可能性も考えられた。交易路網は概ね東西方向と南北方向の路線から構成されており、これらの路線立地の変遷を捉えるためには、広大な範囲を踏査対象とする必要があった。

以上の理由で調査対象地域が広大となったため、現地調査にあたっては調査対象地域を 4 つの区域（Zones I～IV）に分割し、調査効率を向上させることに努めた。Zone I は、今日の東西基幹道路の北側の広い範囲を占めており、その大部分が海拔標高 600～700 m の沖積平野から成る。Zones II・III は、東西基幹道路の南側、南方のキルギス山脈北麓までの範囲であり、Zone II はカラ・バルタ川の西岸、Zone III は同河川の東岸を占める。いずれの地域も農地開拓により、南から北に傾斜する平坦な緩斜面（海拔標高 700～1,100 m）が広がっている（図 1. 2）。さらに、踏査ではキルギス山脈北麓部分を Zone IV として区別し、東西に細長い北麓の傾斜面から成る Zone IVa と、調査地域南西隅の、大規模な開墾が及んでいないカイナル（Kainar）川流域地帯から成る Zone IVb とに細分した。基本的に、これらの Zone 単位で踏査を実施した。

調査地域全体を見るとかなり広大な地域ではあるが、その大部分では農地開拓が進んでおり、大小問わず古代遺跡の多くは既に消失している。農地においては度重な

る耕作のため遺物散布地の確認すらも十分に望めないため、調査地域を面的に廻る悉皆的な方法は適しておらず、代わりに、Google Earth 等の衛星画像上であらかじめ地物を確認しておき、これらを現地で検証する手法が最も有効であった。現地では、事前に確認した地物情報を基に、小河川単位に車両及び徒歩による踏査を実施した。この方法により、農地化されていない小河川沿いの段丘面上において、数多くの遺跡を記録した。なお、Zone I 東部では農地開拓の影響が強く見られ、多くの小河川が途切れるか消失していた。このため、Zone I 西部で認められたような小河川沿い段丘面が残らず、衛星画像上で確認できた地物が僅少であった。加えて、広大な面積における調査に際して時間的制約が大きかったため、十分な踏査を実施していない。また、Zone II の大半、及び、Zone III の南半から Zone IVa のカラ・バルタ川東岸部分にかけても農地開拓が極めて進んでおり、一部のクルガンを除いて、衛星画像上及び現地において地物をほとんど確認できなかった。このため、第 1 次調査が終了した段階で、実質的に踏査の対象地域から除外した。こうした事情から、重点的に踏査できた範囲は 500 km² に満たず、設定した調査地域全体の 39% 未満にとどまった。

各遺跡では、残された遺構を地表で確認した後、ハンディタイプの GNSS¹⁾ 受信機（Garmin® GPS map 62s）により現地の座標を取得した。座標取得の後には、本プロジェクトのために用意したサーヴェイ・シートを用いて、遺跡の記録を行った（図 1. 3）。記録項目は、「遺跡番号（Site No.）」、「登録番号（Reg. No.）」、「遺跡名（Site Name）」、「踏査日（Date）」、「記録者（Recorder）」、「座標（Coordinates）」、「標高（Elevation）」、「行政区名（Administrative division）」、「参照地図（Map used for the survey）」といった基本情報に続き、「地形的特徴（Topographic Feature）」、「踏査内容（Survey Contents）」、「遺跡種別（Site Category）」、「確認遺構（Feature Confirmed on Site）」、「現地表面の状態（Surface）」、「水資源の確保方法（Water Catchment）」、「現況（Present Condition）」、「採集遺物の年代（Period of Collected Artifacts）」という遺跡の具体的情報と、「周辺地図（Topographic Map）」のスケッチ用スペースから成る²⁾。遺跡の具体的情報については、現地での作業効率に鑑みて、項目選択により簡便に記録できるように工夫した。サーヴェイ・シートへの記入と同時に、遺跡の写真記録も行った。写真記録は、地上撮影と UAV による空撮を実施した。前述のとおり、調査地域の大部分は北に緩やかに傾斜する平坦面から成るため、遺跡全体の形態や状況を地上

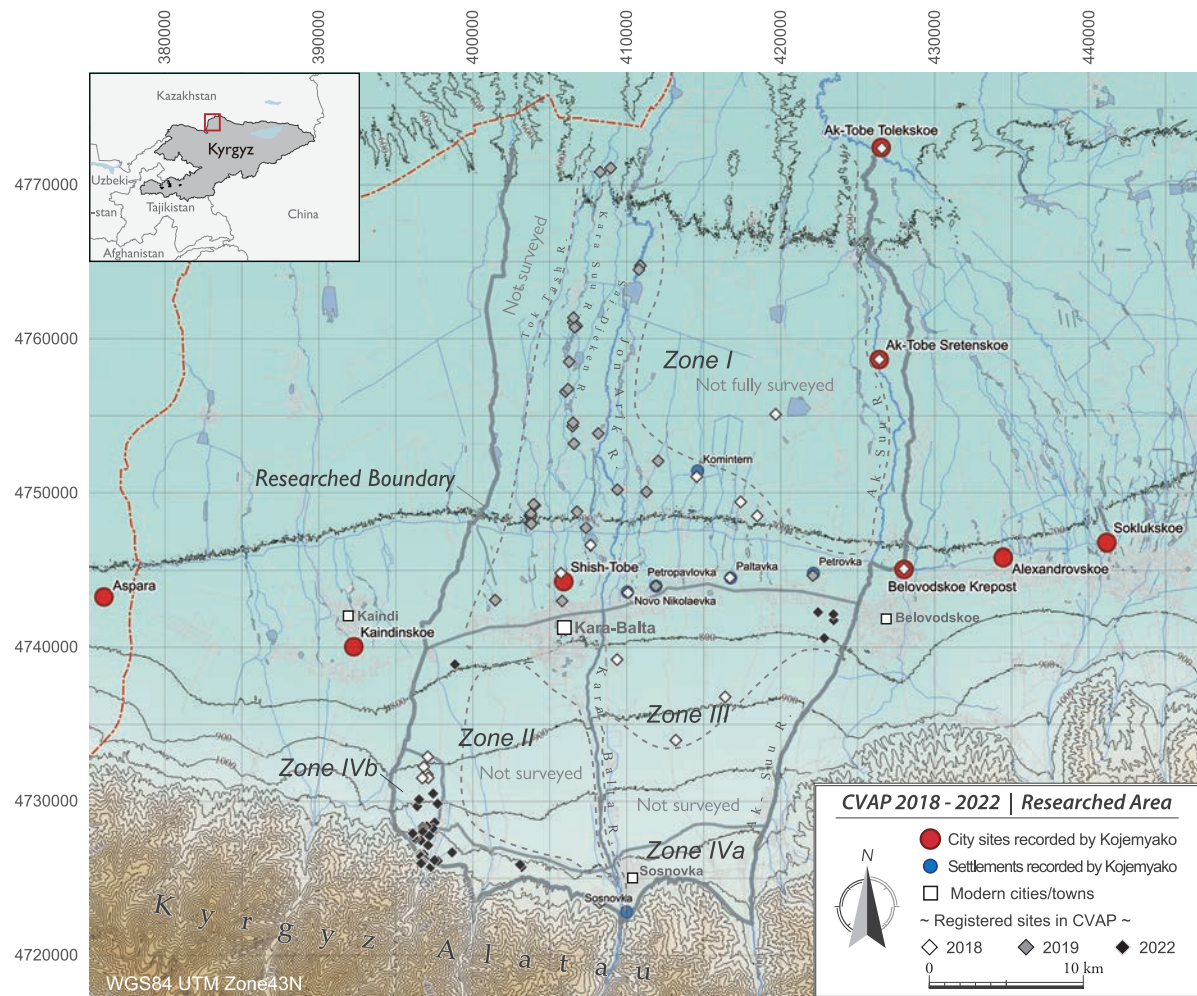


図 1.1 遺跡の登録年次別分布状況 (1: 500,000)



図 1.2 Zones II・IIIの景観（南から）

SITE SURVEY SHEET

Site No. : _____ Coordinates: (E) _____
 Reg. No. : _____ (N) _____
 Site Name : _____ Elevation: _____ m
 Date (yy/mm/dd) : ____ / ____ / ____ Administrative division: _____
 Recorder : _____
 Map used for the survey: _____

[Topographic Feature]

☐ Plain ☐ Hill ☐ Terrace ☐ Spur
☐ Plateau ☐ Slope ☐ Ridge ☐ Alluvial fan

[Survey Contents]

☐ Surface collection ☐ Sounding ☐ Measurement
☐ Topographic survey ☐ Photogrammetry ☐ Contour mapping
☐ Inquiring survey ☐ Aerial photographing ☐ Other

[Site Category]

Settlement :

☐ City ☐ Village ☐ Fort ☐ Others
☐ Town ☐ Hamlet ☐ Watchtower

Domestic Remain :

☐ Enclosure (isolated) ☐ Windbreak ☐ Cup-mark ☐ Pottery scatter
☐ Enclosure (complex) ☐ Rock-shelter/Cave ☐ Terrace wall ☐ Lithic scatter
☐ Encampment ☐ Stone alignment ☐ Stone wall ☐ Others

Funerary/Ritual Remain :

☐ Cemetery ☐ Grave ☐ Dolmen ☐ Stone setting
☐ Cairn/Tumulus ☐ Shaft tomb ☐ Pottery scatter ☐ Others

Miscellaneous :

☐ Petroglyph ☐ Others

[Feature Confirmed on Site]

☐ House ☐ Monument ☐ Midden ☐ Others
☐ Public building ☐ Hearth ☐ Boulder scatter
☐ Temple ☐ Kiln ☐ Flattened space

[Surface]

☐ Bare rock ☐ Cultivated ☐ Swamp ☐ Grassland
☐ Barren ☐ Sand ☐ Agricultural ☐ Others

[Water Catchment]

☐ Stream (perennial) ☐ Spring ☐ Cistern ☐ Barrage
☐ Stream (seasonal) ☐ Well ☐ Aqueduct ☐ Others

[Present Condition]

☐ Well ☐ Plundered ☐ Grazing
☐ Eroded ☐ Destroyed (Cultivated) ☐ Others
☐ Weathered ☐ Destroyed (Constructed)

[Period of Collected Artifacts]

☐ Lower Palaeo ☐ Chalcolithic ☐ Iron Age ☐ Sogdian ☐ Modern Period
☐ Middle Palaeo ☐ Early Bronze ☐ Saka ☐ Early Middle ☐ Undetermined
☐ Upper Palaeo ☐ Middle Bronze ☐ Wusun ☐ Kara khan ☐ Others
☐ Meso-Neo ☐ Late Bronze ☐ Turk ☐ Kara Khitai

[Topographic Map]

図 1.3 サーヴェイ・シート (左：表面；右：裏面)

撮影のみから把握するのは難しい。このため、第2次調査から UAV (DJI® Mavic Air) を導入し、空撮による記録を積極的に実施した。サーヴェイ・シートを用いた記録と写真記録の後には遺跡内を踏査し、遺物の採集に努めた。本プロジェクトで対象としたチュー渓谷西部では、比較的大きな居住地遺跡を除いて、現地表面において遺物をほとんど採集できなかった。これは、草本類の繁茂に加えて、遺跡の性質上、元来遺物の量が少ないことに起因すると考えられる。

遺跡において取得した属性データについては、Microsoft® Excel® 上に入力し、デジタル・データとして管理できるようにした。また、QGIS 上で調査地域のデータを蓄積し、視覚的に遺跡の分布状況を把握できるように整備した。また、採集した土器片については、口縁部や底部等の器種の復元が可能な部位を対象として、手書き実測による記録を行った。作業後は作成した実測図のデジタル・スキャンを行い、このスキャン・データを Adobe® Illustrator® によりトレースした。トレースした図版は、他のデジタル・データと共に、一元的に管理している。

3. 調査の経過

上記の研究目的を達成するために、3 次につながる現地調査を実施した。研究期間途中で新型コロナウイルス感染症が世界的に感染拡大したため、現地調査が延期を余儀なくされたものの、当初の計画どおりに調査を完了した。各調査の概要について、以下に示す。

【第1次調査】

期間：2018 年 9 月 26 日～10 月 5 日（9 調査日）

参加者：

山藤 正敏（独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所）
バキット・アマンバエワ（Bakit AMANBAEVA）（キルギス共和国国立科学アカデミー歴史考古学民族学研究所）
ダニヤル・バズィロフ（Danियar BAZILOV）（キルギス共和国チュー州ジャイル地区文化事務所）

主要な対象地域：

調査対象地域全体の様相を掴むため、既知の都市遺跡を含めて広く全域を踏査した。

調査成果：

調査地域全体において、21 件の遺跡を記録した。このうち 8 件は既知の遺跡であり、1 件（S011）を除いて、かつてコジェミャコにより調査された中世居住址である。この他の 13 件は、新規に確認した小型遺跡である。

【第2次調査】

期間：2019 年 10 月 2 日～10 月 11 日（8 調査日）

参加者：

山藤 正敏

バキット・アマンバエワ

ダニヤル・バズィロフ

主要な対象地域：

第1次調査により比較的遺構が残存していることが判明した、調査地域北西部の小河川沿いに重点を置いた踏査を実施した。

調査成果：

調査地域北西部において、30 件の遺跡を記録した。このうち 2 件（N002・004）のみが既知の遺跡であった。また、調査地域の北西端において、中型の町（N040）を新規に確認・記録した。

【第3次調査】

期間：2022 年 9 月 11 日～9 月 24 日（11 調査日）

参加者：

山藤 正敏

バキット・アマンバエワ

ダニヤル・バズィロフ

主要な対象地域：

第1・2次調査でほぼ未踏査であった南西部（Zone IVb）及びその周辺と、調査地域南半部に多く分布するクルガンの記録に重点を置いた踏査を実施した。

調査成果：

調査地域南西部山麓地帯とその近傍において、31 件の遺跡を記録した。また、調査地南半部のクルガン 3 件を踏査・記録し、4 件を目視・写真記録した。さらに、第2次調査時に発見した N040 を再訪し、UAV を用いた地形測量を実施した。

註

- 1) Global Navigation Satellite System の略であり、アメリカの GPS やロシアの GLONASS もこれに含まれる。
- 2) キルギス側研究者や他諸外国研究者との将来にわたる情報共有を念頭に、サーヴェイ・シートの記述言語は全て英語とした。